

機関番号：34506

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720224

研究課題名 (和文) 近世以降における日本の自然環境変化に関する研究－絵図・地図のデジタル化を通じて－

研究課題名 (英文) Research on change of the environment in Japan after the Edo period: From analysis of various old pictorial maps

研究代表者

鳴海 邦匡 (NARUMI KUNITADA)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：00420414

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、近世以降の自然環境の変化を追跡するうえで、古地図を有効な資料と評価し、有用な資料のデータを収集し、その分析を行うものである。特徴的な環境の変化、資料の存在状況といった点から判断して、里山、陵墓林、神社林、都市の治水というテーマを選び分析を試みた。それぞれのテーマについて、論文や学会発表を行うほか、陵墓林と都市の治水については、貴重な資料群を見出すこととなり、その資料集を発行することができた。

研究成果の概要 (英文)：

This research conducts collection and analysis of various old map data, in order to clarify change of the environment after the Edo period. The analyzed areas are Satoyama, the woods around Imperial Mausoleums, the woods around the Shinto Shrines, and a city, judging from the existence and the feature of an old map. In those themes, the woods around Imperial Mausoleums and the city were able to publish the collection of data.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：歴史地理学

1. 研究開始当初の背景

(1) 代表者は、本研究課題に取り組む以前から、近世日本の農村における測量技術の普及プロセスの解明をテーマとして、1998年以降、研究成果を公表してきた。その間、2006年から2007年には、若手研究 (B) 「日本近

世の農村社会における土地測量の普及過程とその近代地籍測量への影響」を得た。そして、その成果の一部については、研究公開促進費を得て2007年2月に九州大学出版会より『近世日本の地図と測量』と題する書籍を刊行することとなった。

こうした研究を進めていく過程で、本研究課題を議論するうえで有効な資料を見出すこととなった。そのうちのひとつが、実測に基づき作製された近世絵図の存在である。これらの絵図は、例えば、近世において土地の争論や検地など、土地の利用をめぐる作製された資料であったように、かなり正確にその土地の形状や利用状況、あるいは植生被覆の状態を表現するものであった。そして、何より測量精度の高い近世絵図は、近代以降の地図などとの比較を確実にするものとして評価できるものであった。

近世絵図とともに、比較の軸として注目したのが、正式2万分1地形図の存在である。この地形図は、日本で初めて測地学的な近代測量に基づき作製された地形図であるが、これまでの復元研究では、仮製図や迅速図に比べてこの地図が注目されることは少なかった。これに対して本研究では、この地形図を積極的に活用して議論を進めることとした。それは、景観復元の研究における資料性の高さを、これまでの研究を通じて確認することができたからである。

(2) これまで実施した代表者の研究から、近世以降における身近な自然環境の変化を追跡するうえで、社寺林と陵墓林における森林景観の変遷が特徴的な傾向を示すことを明らかにすることができた。そこで、本研究では、まず、研究の端緒として、これらの森林景観もふくめて、以下に示したような3つのテーマで検討していくことを考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における近世以降の景観の変化に注目し、特に身近な自然環境の変化を追跡していくことである。そこで議論をすすめていくために3つの課題を設定した。

まず、最初の課題として、①近世から近代における里山の植生景観の変化と、その利用について検証することを想定した。素材とする主な資料は、近世における農村の実測図である。それらの事例を手がかりに、景観の変化を追跡することとした。

次に設定した課題は、②近世から近代における陵墓と社寺林にみられる植生景観の変化と、その意味について検討することである。陵墓や社寺は幕府や明治政府により積極的に調査が実施されており、その際に作製された資料を手がかりに景観変化を追跡することとした。

最後に挙げる課題は、最も大きな環境変化とも考えることができる③都市の建設と管理に関わるものである。近世における都市開発の過程を、当時の実測図を素材に辿るのが本課題の意図である。

3. 研究の方法

研究を進めるうえで最も基礎となる作業は、地域環境資料として活用できる資料を見出す作業である。それを目的として実施する調査は、現地の資料調査を基本とする。その調査では、資料の撮影および調書の作成が主な作業となっている。そのうえで、調査収集した地域を対象として、現地の観察などを調査を実施していくこととなる。

さらに調査した近世絵図のなかから、本研究課題にとって重要な資料を選択し、それらについては多くの絵図が大型であることから、文化財（古地図）撮影専門の業者に依頼し撮影を行うこととする。そのようにして得られた高精細なデジタルデータを加工し分析をすすめ、地域環境資料として共有できるコンテンツを作成していく。

4. 研究成果

上記に記した研究目的・方法に従って研究を進めた成果は以下の通りである。

(1) ①のテーマ（里山）

本テーマについては、実際に作業を進めていく過程で、他の②③のテーマに比重を置くこととなったため、あまり進めることができなかった。ここでの作業としては、近世の里山の景観について、イメージとしての名所の景観と実体との差異を検証し、それらを撮影したうえで論文として報告した（廣川・鳴海、2009）。

(2) ②のテーマ（神社林と陵墓林）

本テーマのうち、神社林の景観変遷については、初期の資料調査を進める過程で、近世の大工頭中井家によって作成された社寺の絵図が有効な資料であると判断することとなった。そこで、京都大学附属図書館所蔵の「中井家絵図・書類」や京都府立総合資料館所蔵「中井家資料」などの調査を実施した。結論から述べると当初設定したような境内の植生を細かく描いた絵図を見出すことができなかったが、中井家の古地図に関する基礎調査の充実や河川改修に絡む事実の発見など、貴重な所見を得ることができた。

また、陵墓林の景観変遷については、宮内庁書陵部所蔵の図書課所蔵資料や公文書を中心に資料調査を実施した。その結果、幕末から近代にかけての陵墓林の景観を知る有効な資料が多数あることを確認し、なかでも、明治初期の陵墓林を写實的に描いた絵画集に注目し、資料集として発行した（鳴海・上田、2011）

(3) ③のテーマ（都市）

本研究で設定した3つのテーマのうち、もっとも調査が進展したのが、この③のテーマ

となった。

調査の対象となった主な資料は、兵庫県篠山市教育委員会に所蔵される青山家文書である。青山家文書は、有数の譜代大名家文書として知られているが、今回、注目した絵図資料群の多くはこれまであまり調査が行われてこなかった資料と評価できるものである。その資料のなかに、藩主が17世紀後半に大坂城代をつとめた時期に集められた淀川水系や大阪湾岸の改修に関わる詳細な絵図が多く残されており、それらはほかに類例のない資料といえるものである。この資料を素材として、近世の早い段階における淀川と大阪湾岸の整備を主体とした都市開発・管理の実態について分析を行い、成果の一部を学会発表や論文（上田・鳴海、2009）、資料集（鳴海・上田・大澤、2009）として報告した。これらの成果については、現在、出版社を通じた刊行を計画し、作業を進めている段階である。

(4) そのほか

上記3つのテーマ以外のもので、分析対象とした絵図の作製技術の検討（鳴海、2008；鳴海、2009；磯永・鳴海、2010）、研究成果の表現や活用の検討（鳴海・大澤、2009）といったテーマについて論文として報告しているほか、集積した絵図の画像データを、関連の博物館や自治体の場において公表する手段を現在検討中となっている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ①磯永和貴、鳴海邦匡、近世村絵図の史料学（一）—大阪商業大学商業史博物館蔵「河内邦茨田郡藤田村文書」の村絵図を通して—、商業史博物館紀要、査読無、2009、10号、pp. 1—30、
- ②鳴海邦匡、大澤研一、「城下町大坂」展—大阪大学総合学術博物館と大阪歴史博物館との連携企画展の経験から—、歴史学研究、査読無、2009、855巻、pp. 17—25・41・62、
- ③廣川和花、鳴海邦匡、名所「待兼山」の成立、上方文藝研究、査読無、2009、6号、pp. 44—57、
- ④鳴海邦匡、史料紹介 九州大学附属図書館所蔵『秘伝地域図法大全書』乾巻、甲南大学紀要、査読無、2009、文学部編159（歴史文化特集号）、pp. 53—82、
- ⑤上田長生、鳴海邦匡、篠山藩青山家文書にみる大坂城代時代の絵図—概要の紹介—、大阪の歴史、査読無、72、2009、pp.

39—57、

- ⑥鳴海邦匡、近世絵図にみる測量の記録とその表現、歴史学研究、査読無、842号（特集 世界のなかの近世絵図（Ⅱ））2008、pp. 13—24・32、

〔学会発表〕（計9件）

- ①鳴海邦匡（代表）、上田長生、絵図からみた近世前期大坂における河川整備事業—篠山藩青山家文書の分析から—、人文地理学会、2010年11月21日、奈良教育大学、
- ②鳴海邦匡、測量からみた近世大坂における河川整備事業—篠山藩青山家文書の絵図の分析から—、兵庫地理学協会・春季例会、2010年5月29日、関西学院大学上ヶ原キャンパス、
- ③鳴海邦匡、近世日本の測量術と絵図、「しまたてい」公開座談会「琉球の測量技術と技師たち」、2010年3月26日、沖縄県立博物館・美術館講座室、
- ④鳴海邦匡、篠山藩青山家文書の絵図にみる畿内の河川整備事業、第3回新「尼崎市史」研究会、2009年7月10日、尼崎市中央地域振興センターコミュニティホール、
- ⑤鳴海邦匡、上田長生、大坂城代と絵図—篠山藩青山家文書の事例を中心に—、2008年度人文地理学会、2008年11月9日、筑波大学、
- ⑥鳴海邦匡（代表）、岡本有希子、長澤良太、小林茂、グーグルアースと外邦図、日本国際地図学会・平成20年度定期大会・シンポジウム（1）外邦図の集成と多面的活用：アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして、2008年8月9日、国土交通省国土地理院、
- ⑦鳴海邦匡、篠山藩青山家文書における絵図資料調査への取り組み—これまでの経緯と今後の課題—、大坂諸藩研究会、2008年7月20日、関西大学、
- ⑧鳴海邦匡（代表）、大澤研一、大学博物館と自治体博物館の連携について—大阪大学総合学術博物館・大阪歴史博物館連携企画「城下町大坂」展の経験から—、大学博物館等協議会2008年大会・第3回博物科学会 in 大阪大学、2008年6月6日、大阪大学、
- ⑨鳴海邦匡（代表）、大澤研一、小林茂、近世大坂の武士と絵図—「城下町大坂」展の経験を通じて—、平成20年度（第51回）歴史地理学会大会、2008年5月18日、宮城大学大和キャンパス、

〔その他〕

〈報告書〉

- ①鳴海邦匡、上田長行、宮内庁書陵部陵墓課所蔵 明治十二年『御陵図』、鳴海邦匡、2011年2月14日、計130頁

- ②小林茂、鳴海邦匡、波江彰彦編、日本地政学の組織と活動—総合地理研究会と皇戦会—、大阪大学文学研究科人文地理学教室、2010年11月、口絵4+v+171頁
- ③鳴海邦匡、上田長生、大澤研一、「篠山藩青山家文書」絵図目録：近世前期大坂周辺絵図、2009年7月、計52+iv頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鳴海邦匡 (NARUMI KUNITADA)
甲南大学・文学部・准教授
研究者番号：00420414

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：